

ELV 入庫作業を軽減化、JARA とホーユーが仕組み共同開発へ

2021.02.01 付 日刊自動車新聞掲載

JARA（北島宗尚社長、東京都中央区）と自動車関連業務システムの開発を手掛けるホーユー（坂本成輝社長、東京都新宿区）は、ELV（使用済み自動車）入庫に伴う作業を軽減する仕組みを共同開発することに合意した。

JARAのATRS（オートモービル・トータルリサイクルシステム）とホーユーのC3（カー・カタログ・カメラ）システムで、コーションプレートや車検証、ナンバープレート情報の自動読み取り機能を連携し、入庫業務効率化を支援する。

自動車リサイクル部品流通システムへの本格的な人工知能（AI）搭載は業界初で、作業工数の大幅削減が図れる。

将来的にはATRSに蓄積されたデータを活用し、整備工場やガソリンスタンド、中古車業界との機能連携も検討する。

C3システムは、光学文字認識（OCR）とAIを組み合わせた画像認識ツール。コーションプレートなどを撮影すると、画像情報をAIで分析・データ化する。データを基に、ホーユーが管理する最新の自動車カタログデータを参照し、車両のモデルやグレードのスペック、装備データを呼び出すことができる。車検証がない場合でも、車両識別や入庫前の業務判断が可能となる。

一般的に、ELVで入庫時に車検証がある車両は全体の6割程度となっている。車検証がない場合、リードタイムが発生していた。

新たな試みでは、車検証がない場合でも車両情報確認を迅速化し、入庫管理作業の簡略化につなげる。

災害時などのイレギュラーな入庫管理対応にも効果を見込んでいる。

また、JARAはATRS内に蓄積された車両マスタに対して、コーションプレート情報の読み取りで出力されたデータの補完を目指す。

部品登録時の基本車両情報の自動化と、入庫から部品登録までの業務プロセスのシームレス化を計画する。

両社は、2021年夏頃をめどにシステムの試験運用を始め、随時ATRSユーザーに展開する計画だ。